



44
2024

創造人

Creative People

早稲田大学 創造理工学部・研究科 広報誌

Interview

エミール・ゾラの
創作の過程を明らかにする――
自然科学に影響を受けた
『観察』と『実験』とは――

社会文化領域
野田 農
准教授

フィールド
フランス文学、リアリズム、エミール・ゾラ

Interview

創造人 ④——Minori Noda

エミール・ゾラの創作の過程を明らかにする—— 自然科学に影響を受けた『観察』と『実験』とは

19世紀後半のフランス自然主義を代表する大作家エミール・ゾラ。野田准教授の専門は、フランス文学で、特にゾラの小説創造の過程を明らかにすることに情熱を注いできた。その特徴的なスタイルと描写に魅せられたことが、この作家を探求するきっかけになったという。

「“自然主義”というのはゾラが提唱した創作上の美学です。彼は小説において、理想を排して現実をありのままに描写することを目指しました。代表作の一つである『居酒屋』（1877）で成功を収め、パリ郊外のメダンに別荘を購入し、ギ・ド・モーパッサンやジョリス＝カルル・ユイスマンスなどの後輩作家と共に“自然主義”のグループのリーダーとなった頃に書かれた『実験小説論』（1880）には、彼の作品の特徴を色濃く見出すことができます。この理論的著作は、当時の生物学、生理学、医学分野において大きな影響力を持っていたクロード・ベルナールの『実験医学序説』（1865）から着想を得て、ベルナールの説く“観察”と“実験”を自らの文学創造上の原理とし、小説の表現上にこれらの科学的な見方を応用して、当時の社会を客観的に描写することを重視したのです」

ゾラ以前の小説表現には、オノレ・ド・バルザックのような例外はあったにせよ、文学作品の中に科学的な視点が持ち込まれることは主流ではなかった。またゾラの小説の多くは、三人称の客観的な視点から、主に語り手が登場人物を観察することで、作品世界が描かれる。このような意味において、作品成立の過程には、自然科学

の強い影響がある。

「ゾラのライフワークとも言える『ルーゴン＝マッカール叢書』が描いたのは、19世紀半ばの第二帝政時代です。この時代を中心とした4世代5世代に渡る家族の物語なのですが、登場人物を通して受け継がれる遺伝のテーマには、この時代に飛躍的な発展を遂げていた科学思想からの強い影響が感じられます。この頃、隣国イギリスではチャールズ・ダーウィンが『種の起源』（1859）を発表し、進化論を確立した時期とも重なっており、生物学や生理学を中心に科学が飛躍的発展を遂げた時代でした」

1880年頃のゾラは『ルーゴン＝マッカール叢書』の半数近くの作品を既に刊行しており、ベルナールの主張を小説に応用することを考えていた。

「ゾラの創作において、“観察”は徹底した取材によって行われたとも考えることができます。彼は多くの創作の過程で、まずある程度まで作品のプロットを構想してから、枠組みを決め、その後に膨大な資料調査や取材を行ったのちに作品を執筆したことがわかっています。そのように物語が生み出されていく過程の中で、“実験”は登場人物の設定と、その行動や物語の展開として捉えることが可能です。こうした当時の科学思想に影響を受けながら、それまでの文学創造のあり方を乗り越えていこうとする創作態度は、同時代の批評家やその後の文学研究の中で、批判に晒されることになるのですが、自然主義を表す重要な概念であることもまた事実です」





精緻な取材により19世紀のパリが現代に蘇る

“観察”を重視する姿勢は、人間の生の有り様を如実に描き出すことになる。それはときに生々しく、読者に強い嫌悪を引き起こすこともあった。そのため、ゾラの作品の多くは、同時代の人々の議論の対象にもなった。当時、職業としての小説家が誕生して間もない時代に、『ルーゴン＝マッカーナル叢書』の7番目の作品である小説『居酒屋』の成功によって、ゾラは巨万の富を得た。そういった意味では、彼の創作の手法が、当時の大衆に広く受け入れられたとも言える。

『居酒屋』という作品は、パリの場末に暮らす洗濯婦の生活を描いたもので、当時のベストセラーになりました。主人公のジェルヴェーズの住むアパートマンの描写を読むと、読者は登場人物の視点を通じて、19世紀の労働者たちの生活空間を目の当たりにするような錯覚に陥ります。それは、こうした描写を記述する上で、ゾラが実際の空間を訪れ、入念なメモを残し、視覚、聴覚、嗅覚をはじめとする五感を総動員させて執筆しているからなのです。」

このように読者にあたかも過去の時代の人々の生活を目撃するような感覚を与えるゾラの作品は、アナール学派の歴史家アラン・コルバンをはじめとする現代のフランス歴史学の著作において、歴史的資料としての価値を有するテキストとして頻繁に引用されている。ゾラが小説の執筆に先駆けて行った取材や資料調査といった、いわ

ば“観察”と“実験”の過程を通じて練り上げられた作品は、精緻な側面を多分に備えている。

一冊の本との出逢いから ゾラ研究の道へ

野田准教授がゾラの研究を始めるきっかけはなんだったのか。

「私が大学に入学した翌年の2002年がちょうどゾラの没後100年に当たり、日本でも研究の機運が高まっていました。当時はゾラの未邦訳の作品が漸く翻訳され始めた時代で、日本を代表するゾラ研究者である慶應義塾大学の小倉孝誠先生と、東京大学の宮下志朗先生との編著『いま、なぜゾラか—ゾラ入門』が刊行されて、大学生協の書店で偶然手に取ることができたのも幸運でした。今思い返せば、不思議な縁があったのかも知れません。ゾラやモーパッサンをはじめとするフランス自然主義文学の作品を少しずつ読み解きながら、外国語を学ぶ喜びを感じると同時に、フランス小説の豊かな作品世界に没頭できることは、純粹に楽しいことでした」

ゾラに熱中した野田准教授は、ただ読むだけに飽き足らず、その創作の過程に強い興味を抱き、その後ゾラ研究の道を歩み始めることとなった。

Interview

創造人 ④④ ———— Minorori Noda

自分の興味を探究する喜びを伝えたい

理系の学生に対して、語学や教養科目の授業を提供する社会文化領域。この、ある種特殊な立ち位置だからこそ提供できる価値とは。

「仮説を持って検証していくというのは、アカデミアであれば文系にも理系にも違いはないと思います。それはゾラの言う“観察と実験”とも通ずるものがあるのではないのでしょうか。また文理を問わず、学問の道を進む上では、様々なデータやファクトを知ること重要ですが、自分の興味や関心の所在を突き詰めることもまた重要です。むしろそれさえ定まれば、ある部分では、あとは虚心坦懐にやっていけば良いとも言えるでしょう。理工学術院で学ぶ学生のみなさんにも、自分の興味に従うということ、そしてそれを突き詰めることは素晴らしいものだ伝えたい気持ちがあります。ただ、それをストレートに表現するのではなくて、授業を通じて、また研究の成果を通じて伝えられるよう日々研鑽を重ねています」

自分の興味を突き詰めるために必要なものとは

「勉学に限らず、さまざまなものに触れることが大切だと思います。早稲田大学のキャンパス内には無料で利用できるいくつかの博物館がありますし、大学近辺には早稲田松竹などの名画座もあります。また、高田馬場界限は非常に国際色豊かですから、自分から積極的に動けば、いろいろなチャンスや出会いがあるはずです。アジアを中心に世界の方々も多く暮らすエリアなので、キャンパスにとどまることなく、街を歩いてさまざまな事物や人と出会い、学生時代にしかできないことを追求して欲しいですね。そのきっかけになるような経験を提供できるよう日々教育や研究に携わっています」

Works

～直近の業績から～



雑誌「ふらんす」

対訳で楽しむ『メダンのタベ』

白水社

『メダンのタベ』（1880）は、ゾラが1870年代半ばごろから彼の周囲に集まった後輩の自然主義作家たちと構想し書き上げた短編集。普仏戦争の時代を振り返りながら、戦争の不条理を訴えかける作品集を翻訳紹介。2023年10月号から翌年3月号までの全6回の連載を担当。

アラン・コルバン編

雨、太陽、風

天候にたいする感性の歴史

藤原書店

小倉孝誠 監訳

小倉孝誠・野田農・足立和彦・高橋愛 訳

本文中にも登場したアナール学派を代表するアラン・コルバンによる天候に対する感性の歴史をめぐる作品。人間が天気に対して、どのように反応し、いかなる感受性を持ってきたかを探っていく。



リアリズム 文学研究会

〈リアリティ〉という〈フィクション〉について考える、人文系研究者たちの語圏横断的なネットワーク。京都大学の同期と立ち上げた研究会で、フランスはもちろんドイツ、イタリア、イギリスなど主に広くヨーロッパを対象に19世紀のリアリズムに迫る。2024年1月27日開催のシンポジウムは「感情とリアリズム—文学と歴史学の対話—」。